

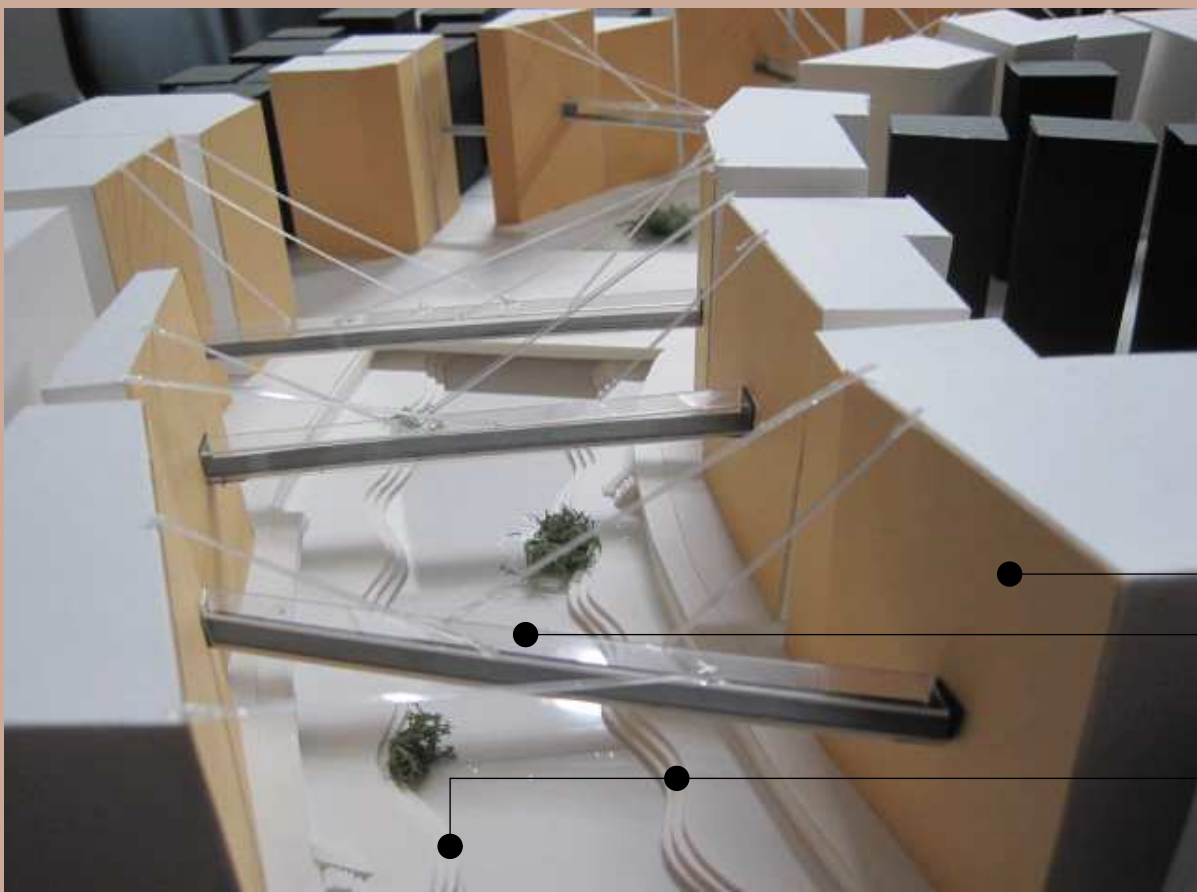
(地方都市再生の) 火に水を注ぐ ＝田川の整備から始まるまちづくり



2014年



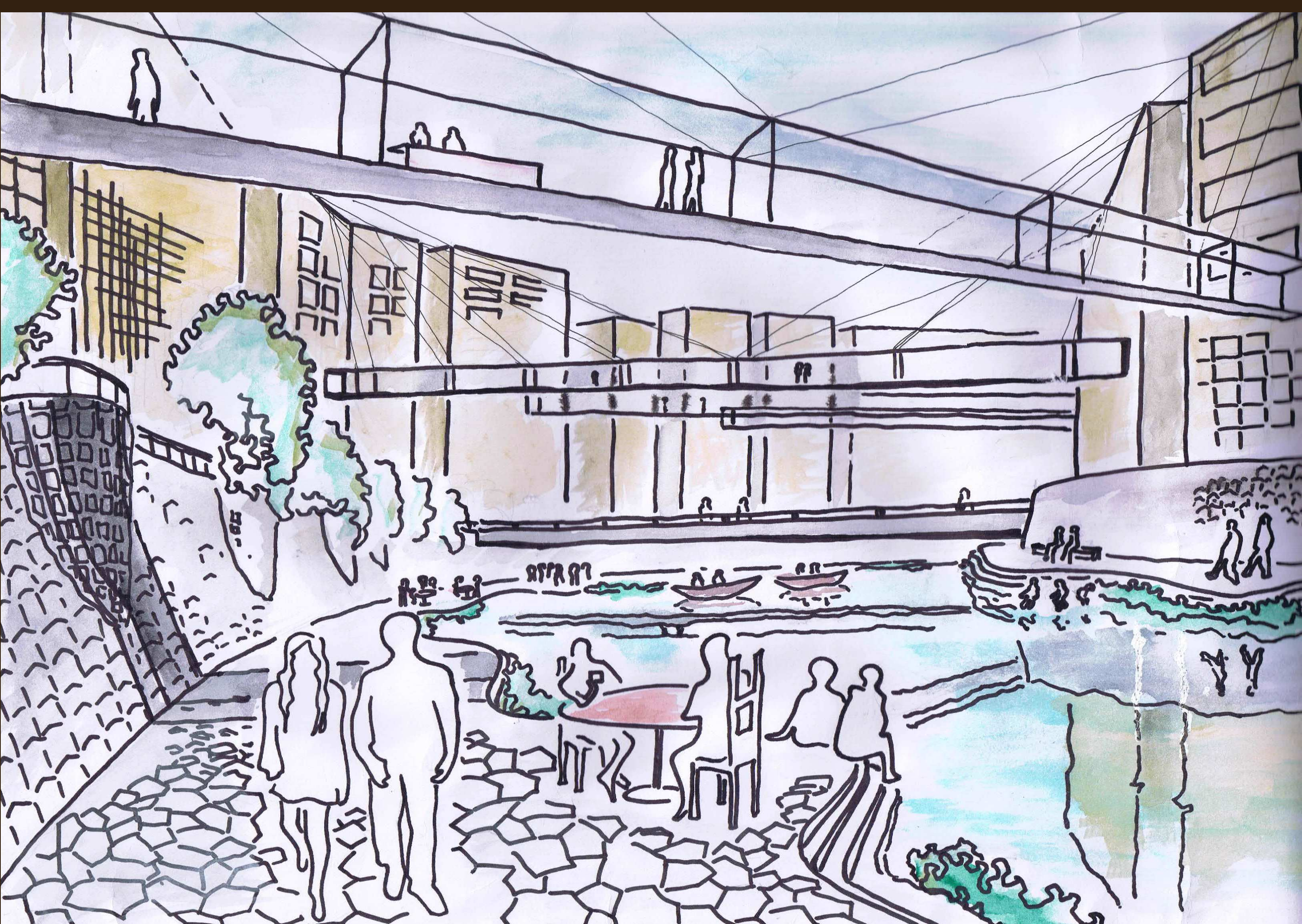
2050年



スカイウェイ

大谷石

波状の岸



対象地：ＪＲ宇都宮駅西口付近の田川周辺

宇都宮市の・・・

場所 栃木県の中南部
人口 約52万人（2014年）
面積 約467km²

地域資源 宇都宮餃子が有名。他にもカクテル、ジャズのまちとしてアピールしているが、県外の人にはあまり知られていないようである（宇都宮ブランド戦略指針 H21）。また、市内で採掘される大谷石も重要な地域資源だ。建築家フランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテル（1923年）で用いられ、関東地震で焼け残ったように、優れた耐火性や耐震性、そして加工が容易で安価という特徴を持つ。

イベント 宇都宮餃子祭りは例年10万人以上の集客力をもつ。11月初めに2日間実施される。国際的なイベントとしては、国内最高峰の自転車ロードレースであるジャパンカップ、熱気球ボンダグランプリが開催され、国内外から観光客が訪れる。

歴史 古くは二荒山神社の門前町として、江戸時代には宇都宮城の城下町として栄えた。交通の要衝。1945年の空襲では市街地の大半を焼失したが、迅速な復興を果たした。高度経済成長期には工業団地の造成を始め、積極的な工業振興や産・学・住が有機的に結ばれたまちづくりを進めてきた。

政策 ネットワーク型コンパクトシティ形成を進めている。中心市街地（駅周辺、県庁など）を核として、少し距離のある生活拠点、産業拠点、観光拠点を公共交通で結ぶ。（宇都宮市都市マスタープラン）

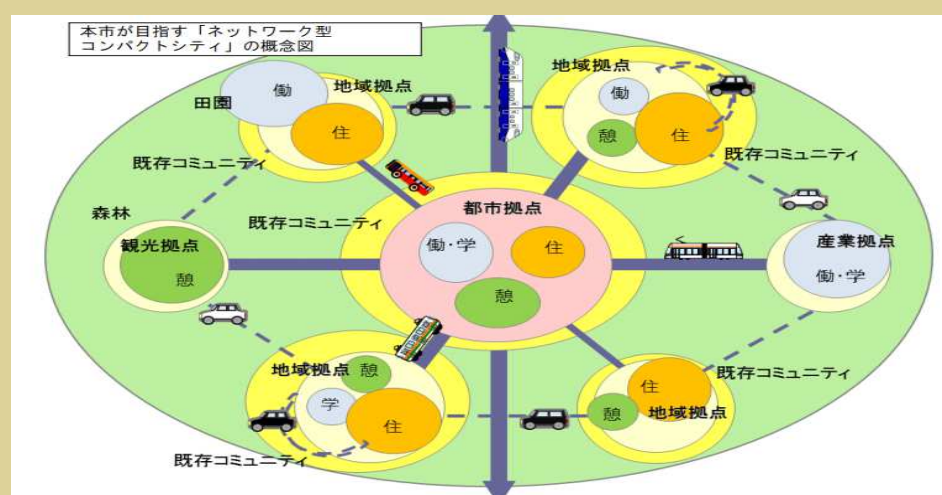
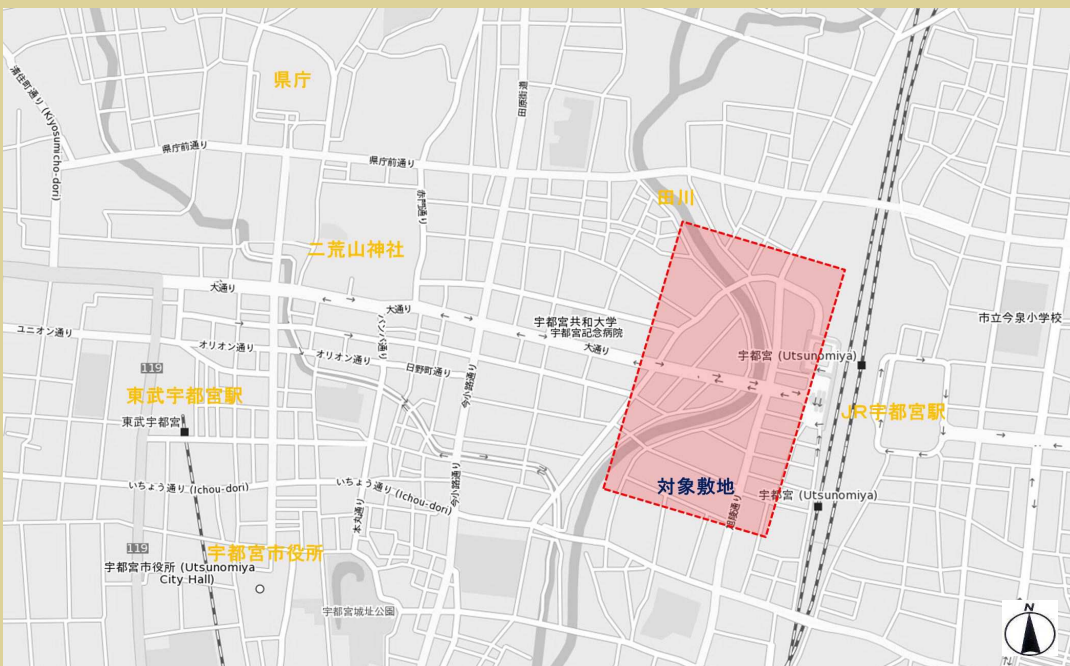
LRT計画 駅の東西をLRTで結び、バスと連携させて面的な交通サービスの提供が計画されている。

強み 南北に東北新幹線、東北自動車道。東西に平成23年に全線開通した北関東自動車道が市内を貫く。東京圏から東北、北海道方面、太平洋から日本海に向かう軸が交差する。他地域との時間距離は縮まっている。

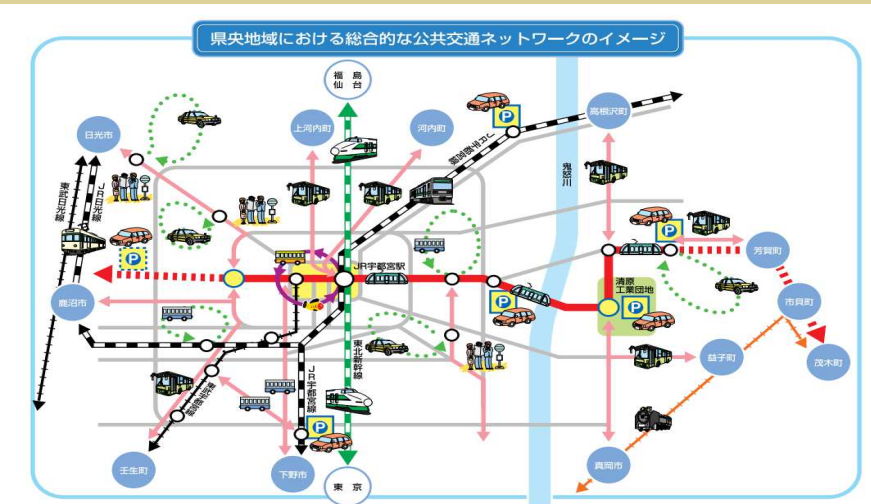
ＪＲ宇都宮駅西地区とは？

駅西側は近くに田川が流れ、市の目抜き通りである大通りが伸び、その先には県内最大の繁華街であるオリオン通り、栃木県庁、二荒山神社が立地する。この地域が中心市街地となっている。ジャパンカップなどのイベントやビジネスで来訪した人々にとって、西側は宇都宮の玄関となっている。しかし、多くの地方都市と同じく、モータリゼーションの進んだことにより都市が拡散し、中心市街地は衰退している。

再び、都心部がかつつのような賑わいを取り戻し、人々が“集う”ために、田川周辺が果たすことができる役割は大きいと考えている。



宇都宮市ネットワーク型コンパクトシティ形成ビジョン H26



宇都宮市で考える公共交通ネットワーク図

人々はここにふらっと寄って、オープンカフェで名物の餃子を食べる。ジャズも聴きながら。子どもたちは川辺で遊んでいる。すわって川を眺めている人がある。夜は、仕事終わりの人や外国人もカクテルを飲んで賑わっている。虫の鳴き声も聞こえてくる。

変わる、田川

リーディング・プロジェクトとなる。まずは田川の整備と様々な活動の促進。

田川は一級河川、日光市が源流で、鬼怒川と合流する。古来から「暴れ川」で、しばしば氾濫してきた。コンクリートブロックによる護岸整備で、植生は少ない。人が集う場所としてのポテンシャルは高いと思う。

河川沿いには歩道が整備されているが、ほとんど人は歩いていない。しかし、駅の近くに水辺空間があることは強みであり、人が集う場所としてのポテンシャルは高いと思う。

橋は人と水の距離を遠ざける。橋をはずし、階段状の岸に再整備する。波状にすることで、人々がいろいろな活動ができる舞台をつくりたい。増えたスペースでオープンカフェの設置、ジャズの演奏などのパフォーマン。橋がなくなったことで、水とふれあうことができるようになる。

この地域の維持・管理は地域住民や企業等のエリアマネジメント組織がおこなっていく。清掃などの環境改善活動、イベントの企画をすることで、地区の環境や人口が向上することは地域の人々の利益になる。近中の緑地帯の中、公営団地の南側だけでなく、コミュニティの形成や地域愛着、様々な合意形成の円滑さの向上にもつながる。

水際部（エコトン）の植生回復により、動植物の生息環境を保全・再生する必要がある

NPO、ボランティア、エリアマネジメント組織が連携し、多自然川づくり、エコロジカルネットワークの形成などの活動をする。

人々が川に近づけるように階段の整備。車いすの人も歩道に降りられるようにスロープも整備。

オープンカフェは川を眺めながら、周辺の飲食店等の料理や飲み物を楽しむことができる。一定の出店費用を徴収し、地域環境の向上などに還元する。

日本の強みは治安の良さなので、夜も酒が外で飲める。外国人もうれしい。駅に近いので公共交通で帰れる。



川沿いを歩いてみる。建物の壁は大谷石で統一されて、独特な景観が出ている。川辺では、いろいろな人がいた。カクテルを飲んで談笑している人、川を掃除している人、いそいそしているビジネスマン、岸で座っている人、上の空の通路では多くの人が行き来しているのが見える。ここは賑やかだ。

川沿いの建物の更新（外部）

川沿いの建物は、様々な用途が混合された複合施設とする。5階以上を住居、オフィスなどの私的な用途。4階以下を商業施設、民衆施設等の公共的な用途とする。

まずは、田川沿いのハード・ソフトの取り組みを実施して、十分に地域の魅力を高めることが、とても重要になる。

田川沿いは、老朽化した建物が多く、また、高度利用されていない。また、高度利用されていない。

河川沿いの一体的な環境を創出するため、景観地区や地区計画等の手法により、高さ、壁面位置、開口率、意匠等を規制し再開発を進める。

高さは8階程度とし、4階レベルでスカイウェイの整備をする。財源として、土地の高度利用による開発利益、土地の地価上昇分や沿道の建物の事業者等から一定の金額を徴収するなどして、民間活力を利用する。

スカイウェイは広く一般に利用され、“公共施設”としての役割を担う。河川により分断される地域の回遊性を高め、また、良好な景観資源として活用する。

建物の河川に面する壁面は大谷石を用いる。景観地区等で意匠の規制をする。大谷石の活用を促進しているNPOとも連携して整備していく。宇都宮の玄関として、宇都宮独自の文化、芸術をアピールできる場所とする。

朝起きて、朝食を食べに階段を下りてレストランに行く。その途中で、毎月一回、地域の清掃活動と一緒にしているおばあちゃんとおった。荷物を運んでいるので手伝ってあげる。ご飯を食べたら、支度をして仕事に行く。駅が近いから自転車も必要ない。

川沿いの建物の更新（内部）

川沿いの建物は、様々な用途が混合された複合施設とする。5階以上を住居、オフィスなどの私的な用途。4階以下を商業施設、民衆施設等の公共的な用途とする。

宇都宮市は、多くの地方都市と同様、モータリゼーションにより、市街地は拡散し、中心市街地は衰退している。市街地として、それぞれの建物を公共交通で結び、ネットワーク型コンパクトシティを進めており、Jは宇都宮駅周辺は1つの核として、指定されている（UrbanSpace H20）。

川沿いの複合施設を建設した地域の受け皿とし、TOU、職住近接、交通弱者に優しいまちづくりにより、常に人々が“集う”場所になる。

SOHOやオフィスの供給により雇用の創出。様々な主体が田川で近接することで、イノベーションを起こしやすい。

様々な階層に対するアフォーダブル住宅の供給により、郊外のファミリー層、高齢者、車庫者等が住み替えし、集まることで、過疎化が急激に進むことのない、持続的な世代間継承の地域をつくる。

ホテルの整備は、日光への観光、宇都宮市内では大谷探検路、国際的なイベントとして、ジャパンカップ、また交通結節点として、日本国外のビジネスマンや観光客の宿泊需要を喚起する。観光案内所を併設することで、利便性を高める。交通人口の増加で、定住人口の減少に対処する。

コンベンションセンターの整備で、MICEの誘致、アフターコンベンションにも対応する。

日光市の人口減少は急激で、少子高齢化が進んでいるので、人口減少を食い止めるために、十分な宿泊サービスを提供できない可能性もあるため、宇都宮市がその役割を担い、連携していく。

農業の産品の販売所として、地産地消の推進、農業振興

利便施設を整備されることで、地区の人口が高まり、さらなる機能の立地を促す。



活動“集う”
生き物“集う”

機能“集う”
観光客“集う”

仕事“集う”
情報“集う”

人が“集う”